

## 浦城と

NPO法人「浦城の歴史を伝える会」の設立

浦城の歴史を伝える会 理事長北嶋雄一

(八郎潟町)



この法人は、地域住民を右対象とし、戦国時代に湖東地区を治めた三浦一族の城「浦城」の歴史と文化を後世に正しく伝承し、また浦城址周辺の自然を保全管理する事業等を行い、併せて、町おこしに寄与することを目的とする。

古より、浦の館の話は伝承されてきた。奥州永慶軍記・秋田軍記・千田軍記等の解説が進むにつ

れて、浦城主の活動が明らかになり、秋田の戦国時代を彷彿とさせる。菅江真澄も浦城を詳細に記録している。八郎潟湖岸に生きた武将の群像が浮き彫りになり、浦城址に関心もって訪ねる人々も多くなった。

従来浦城址には遊歩道がなく、この地を訪れた多くの歴史研究者・愛好家には不評であった。城址の地権者の承諾を得て、十九年六月四日秋田県埋蔵文化財学芸員のご教示を受け、会員の努力により、本格的遊歩道と展望所の整備作業を行う。

以後浦城址を訪れる人も届け出のあった団体も多く三百人を超えている。説明用の資料作りに音を上げていたが、今はパンフレットの完成で対応している。

## 八郎湖畔の戦国時代

「戦国時代はいつからいつまでか？」こんな問いはよくある。

難しい定義であるが、一般的に明応四年（一四九五）の北条早雲が小田原城奪取（城を奪い取る）したことに始まり、後北条氏の滅亡の天正一八年（一五九〇）に終わる。

八郎潟湖岸の戦国時は、戦国時代の末期に安藤家の跡目相続に端を発し、檜山安藤方と湊安藤方の抗争に湖岸と、其の周辺を二分した戦争であった。

奥羽永慶軍記の著者は、雄勝・横堀の医師戸部氏であるが、宝永元年（一七四四）頃の著作で、本書は「十余年かかって奥羽各地を巡歴して古書を読んだ、数少ない奥羽の戦国史として、古来、多くの史家に引用されている名著とされている。

浦城の落城から百年後の執筆であるのでは極めて信憑性が高い。秋田軍記・千田軍記は永慶軍記

を受けて、読者の興味を掻き立てるように書かれた古文書である。三浦兵庫守盛永の勇士が克明に描かれている。盛永が浦城主であったころ、世に言う湊合戦が起こった。秋田の領土を二分した戦争である。

### 浦城主

盛永が浦城の城主になるまで経緯の記録は殆どなく、「関東鎌倉落城の砌甲斐の国より当国に御下着なされる」。の一文はあるだけであるが、ネット検索でおぼろげながらその道が推測できる。様々な古文書があるが、ここでは浦城を主体に書かれている「千田軍記」を主に考察します。



### 湊合戦の発端

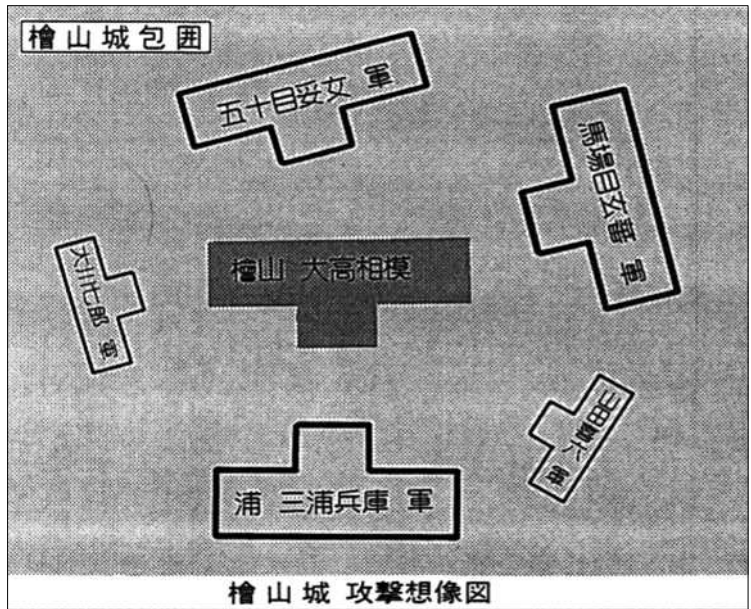
湊城の城主安藤実季は秋田の大将として土崎湊にいた。子どもが一人いて源九郎といって二才に なったばかりである。実季の舎弟(おとうと)の安藤愛季が男鹿脇本城にいた。湊城主安藤実季が病床にあり、「我、今生無為の絆を去り、冥途の旅に赴くなり、然ればここ、源九郎に渡すべけれども、いまだ若年なれば舎弟愛季、成敗(政治を行くこと)致すべし、九郎成人して二十歳にならば湊を渡し給つべし、一門の人々にも顧み申すなり。」と遺言して世を去った。源九郎は八柳長門守定頼の清水城で元服して、安藤愛吉となったが、父の弟の安藤実季が政権移譲をしなかった。

安藤愛吉は家臣の諸城主を集め、清水城で脇本安藤愛季から政権奪還の軍議をかさねた。その結果、「浦城の大将三浦兵庫守盛永と申す者は名代無双の勇士であるのでこれを頼るべし。」との結論に至った。早速、浦城へ使者として林野喜三太が送られ、盛永は清水城へ着いた。盛永は「ここは敵の湊城にも近く、攻撃される恐れもあるので、浦城で軍議を開く。」と行って、安藤愛吉と湊方の重臣を浦城に招き入れた

### 安藤愛季脇本城に去る

湊で一政権をとっていた脇本城主愛季は、「浦城で軍議を開き、おれを攻撃しようとしている。この湊城は平地にある城で攻撃されると危険である。ひとまず脇本城へ移ろう。」と家臣かれこれ千人をつれて脇本城へ逃れる。その後へ安藤愛吉が家臣と湊城へ入って脇本城の安藤愛季を討つ軍議を重ねた。

## 脇本城攻撃の軍議



安藤愛季は脇本城主の他に、檜山城主でもあり、檜山に城代の大高相模守康澄を置いていた。万が一脇本城が落城しても、切山の檜山城は難攻不落城である。最期にこの城へ移ると思われた。

湊側の作戦は、軍勢を檜山攻撃と脇本攻撃の二手に分け、檜山城が落城し火の手が上がれば直ちに脇本城の攻撃を開始することに軍議は成立した。三浦兵庫守盛永檜山城を攻る落す

檜山討つ手大将、三浦兵庫守盛永軍勢かれこれ千人、五十目城主受女守定泰五百人・馬場目城主玄蕃亮泰比五百人合計二千の軍勢で檜山攻撃に向かう。それに山田（豊川）城主山田喜六・大川城（東屋敷）大川七郎も参加した。まるで湖東部全ての諸将が切山の檜山城を目指して進撃を開始した。程なく檜山城についた。その日の大将三浦兵庫は追っ手門から、五十目受女守定泰は搦め手

（裏門）から、馬場目玄蕃亮泰比は搦み合い（城外に出る敵軍と戦う）

### 戦の模様（以下千田軍記の一説）

「両軍互いに矢叫びの声天地も崩るるばかりなり。寄手の者ども、いざ敵に加勢の付かぬうち攻め落とせ者どもと、槍・長刀の鞘はずし城の内へ切つて入らんとする所に、城の者どもも矢倉より飛んで下り、木戸を開き切つて出、両陣互いに入り乱れおつつまくつつ戦いける。されども寄手は大勢なり。新手を入れ替え攻め戦えば城の中者ども、思いもよらぬ事なれば具足を着けざる者は多かりける。この後、軍記特有の個人の戦いが克明に書かれている。戦は延々と一昼夜も続き、切山の檜山城は落城した。【千田軍記引用】

### 浦城落城する（…以後中略…）

栄枯盛衰は世の習い、脇本城攻撃に向かった湊軍は敗退した。その勢いで浦城が攻撃され落城した。御前柳の出来事も落城に由来するものであり八郎瀧町の名所の一つになっている。三浦兵庫守盛永は西観音に飛び降り自刃（じじん「切腹」）した。敵に首を取られないように殿の亡骸を隠したのが石頭院阮天和尚（清源寺の開祖）である。殿様の首と嫡男手代若は、殿様の妹が嫁いだ檜山沢の寺へ匿われたらしい。

### 三浦五郎盛季

千代若は七歳で父の領地を次ぎ、清源寺近くの押切に押切城を築城（城の周りは腰まで埋まるほどの湿地であったらしい）押切城主三浦五郎盛季となった。しかし家臣和田甲斐守の陰謀によって

土崎永覚町で殺害される。奥方は嫡男亀若と幼女を伴い、新城の岩見宗頼を頼るが、後に秋田市金足黒川に移り三浦家の祖先となる。



菅江真澄 ー霞む月星ー

かすむつきほしの文章から

(市のから十八を登り浦城へたどり着く)

「十八坂を越えて滝の沢と言う所に着いた【むらくもの滝】名前はなかった。】寺の跡は(今は、寺屋敷跡と言う。)どの辺だろうか。滝が細く落ちていた。

三浦兵庫頭義豊がいたころの城址は高く、今は田や畑になっているが、その昔の様はわからない(スケッチは別に紹介)。「本廓、御座の間、馬だし、大鐘をかけた櫓跡はあそこ」とそばにいた人が教えてくれた。からめてのほとりに、田に水を引く大きい池があった。堀の跡かも知れない。なにかと昔をしのぶことができる。

義豊は三浦の介平の義明の子孫で、鎌倉を出て(北条方に破れる)飽田路をたどり、城介実季しかし三浦は、湊安東を頼り浦城に居城したことは事実である。この浦城に住む。逆意があるのをいさめ、腹をかきつて死す。



黒川三浦家

浦城主三浦兵庫守盛永から十八代目の三浦晃正氏は現御当主である。藩政時代には肝煎を代々勤めた郷土である。平成十二年から四年かけて館の保存修復工事が行われ、平成十六年三月初秋田市指定文化財となり、昭和十八年十二月、国の重要文化財に指定された。秋田市金足黒川にある。

## 浦城趾の訪問者と伝承

近年、浦城を訪れる人が多くなり、道の整備が先決であり、「浦城の歴史を伝える会」のメンバーの献身的な努力により、散策道が整備された。また、案内板を設置し、展望場を二箇所設け、パンフレットを発行した。ペールに包まれた浦城にはまだまだ解明されていない部分も多く、魅力にあふれている。浦城と因縁の多い事象に取り組み、その伝承に努めたいものである。

平成20年1月1日発行

湖畔時報から転載（転載許可取得）